人生　　怒りを遷(うつ)さず

人間は感情の動物といわれるほど、心の揺れが激しいものである。さらに、他の生き物に比べて知恵があり、それに伴って主張や攻撃性が強くなり、思わぬ言動を取ることがあるものである。

しかし、これも個々当事者同士の場合は、第三者は距離を置いて見ていればよいのであるが、矛先(ほこさき)がいきなりわが身に飛んで来ると傍観という訳にはいかなくなる。所謂(いわゆる)「とばっちり」を食った場合である。この対処の仕方は大切であるが、ここでは、誰かが矛先をわが身に向けてきた場合の理由について考えてみたいと思う。

議論の食い違いの場合は、往々にしてお互いの主張が累乗的(るいじょうてき)に加熱して行く。そして、行き着くところは進退窮まって引っ込みがつかなくなるのである。そうすると、不利を感じた人は傍らに居る人に同意や賛同を求めたくなる。これは何のことはない他者に援軍を求めていることに他ならない。野暮な「甘え」である。多くの人はこれを無意識にしてしまっていることが多い。

人間には知恵があると言ったが、野生の動物よりも愚かな部分も持っている。「弁舌」を生業としている検事や弁護士も広い意味でこ

の範疇からは、必ずしも逃れられない。最も世の中の争いは、夫婦の口争いから裁判まで、些事、大事件と盛り沢山ある。人間の数だけ価値観があるといわれる世界観からすると、当然なことなのかも知れない。

さて、一方同意を求められた側は迷惑である。直接に係わりはないのだからそれだけに不愉快になる。このやり場の無い怒りは弾かれたビー玉のように、他者にぶつけたくなる。怒りの連鎖の始まりである。しかし、古人の中には立派な人もいたのである。しかも二千五百年も前のことである。古代中国の魯国に「孔丘」という人が現れた。そのお弟子さんたちは三千人といわれ、中でも「顔回」という人は、ひときわ優れた賢人であったと云われている。あるとき弟子の一人が、「先生の弟子の中で最も優れているのは誰ですか」と訊ねたことがあった。すると孔子は即座に「顔回である」と答えたのである。弟子はさらに、なぜ顔回なのですかと訊くと「不遷怒」と答えたのである。つまり、顔回は不愉快なことがあってもその不愉快さを他人に覚られない態度をとることが出来る。といって褒めたと伝えられている。顔回も立派であるが、それを見抜いた師もまた慧眼であった。

顔回の行為は一見当たり前のように思えるが、これが難しい。人間の感情は自己制御が最も難しいからである。人は時に損得抜きで小さいことにこだわることがある。他人が見聞きしたら馬鹿らしいようなことでも、ご当人は本気なのである。

顔回は㊃十一歳・江永説によるで病死したと伝えられるが、この報せを受けた孔子は履物を履かずに顔回の家に駆けつけ、哭したと論語には記されている。上位の人や近親者の死に哭することは当時は礼儀でもあったのだが、弟子の死に師が哭するのは極めて珍しい。それほどに孔子は顔回を信頼し、期待をかけていたのだと考えられる。孔子は顔回だけを可愛がっていたわけではない。「子路（しろ）」や「宰予（さいよ）」はしばしば孔子にたしなめられているが、その言葉は愛情に十分裏打ちされている。この信頼関係が二千五百年後の今日まで我々の心を刺激するのかも知れない。

孔子については不明な点も多いが、孔子は自分の果たせなかった理想の政治を実現するために、弟子たちをして官僚の養成に当たったのではないかと想像できる。それには、直ぐにでも大臣に就ける人物―君子―賢人の見識ある人物の養成が必要だったと考えられるからである。論語を読むと孔子は憤りはしたが怒りはしなかった。

それにしても顔回は、どのようにして怒りを遷さずに済ますことができたのであろうか。考えるに顔回は、聡明な人であったから、「融通の利かない堅物、変わり者、立身出世型」などの陰口は耳に届いていたに違いないが、この悪口に対して反論すれば相手を不快にすると先取りして考えたに違いないのだ。しかも、その反論は証明しようもなく、弁解すればさらに深みに引き込まれることを予想できた人だったのである。彼が考えた妙案は、人々の悪口を無視するのでもなく、耳を塞ぐのでもなく全く別のことに考えを切り替えることだったのかも知れない。そうすれば不快感は我が身一身でとどまり、関係の深浅にかかわらず他に影響が及ばないからである。もし、この推論が正しいとすれば、この思考方は哲学そのものに近い。

人間はこの世に登場して以来、「絶対と相対」の相克の中で生きてきた。時代が経過し「儒教」と「老荘」の時代を迎えても結論は出なかった。これを顔回は妥協ではなく、顔回自身が自らを高め、孔子の教えに従って他人の心を傷つけずに「絶対」に極めて近い「仁」や「恕」に昇華させたのである。

過去も現代も思想家は世界中に沢山出現した。でも、伝説を差し引いても顔回の生き方を実践するのは難しい。